

企画展示（2023年1月～）

早逝樹を上手に使う森づくりと家具づくり～静岡大学の森から生まれたモノとコトたち～

主催

「みぢかな木の家具・モノコトづくり」プロジェクト研究所

協力

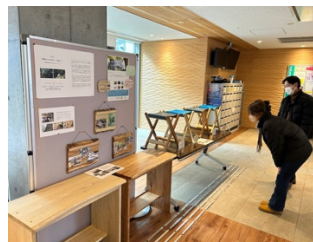
農学部附属フィールド科学教育研究センター森林生態系部門（天竜演習林）、ヨキカグ・プロジェクト、人文社会科学部経済学科「現代産業論」（横田）ゼミ、学務係（人文社会科学部、農学部、教育学部、理学部）



人文社会科学部



教育学部



農学部



理学部

森林が国土の約3分の2を占める日本では、食料・薪炭・木材といった生活の糧として利用したり、水資源を豊かにしたり、災害を防止したりと、**森と人間は多様な関わり**を築いてきました。

しかし、燃料資源の変化、木材価格の低迷、そして物質的な成長を目指した経済活動のなかで、森を所有する者は管理する意欲を失い、森の資源を利用する者（生産者・消費者）は大量生産・大量消費の下で木を材として利用し、多様な関わりが失われていくなかで、**森と人間の距離は少しずつ遠いもの**になってしまいました。

日本の気候は森林の発達に適しており、自然林は種や樹齢が異なる多様な樹木が複雑に関わり合いながら共存しています。しかし、木材の供給源となった森では、樹種も年齢も同じ木で作られる人工的な森づくりが繰り返されてきました。そして最近、木材を早く収穫しようと外来種や国内移入種の早生樹の利用が検討されています。

本展示は、このような森づくりと木の利用の関りのあり方を築き直し、多様な構造の森づくりを考えるために企画されました。これらの製品には、天竜演習林で育つ在来の先駆種（森が攪乱された後に真っ先に成長する樹種）で、成長の早い（あるいは寿命が短い）、いわゆる早生（逝）樹で作られています。これらの木の多くは実用的に利用されず、森づくりにおいても管理の対象とされてきませんでした。しかし、地域に自生する先駆種を上手く活かしながら、先駆種とその後につく後期種が混ざった森づくりをしていくことで、**森と人間の新たな関わり**をつくるきっかけとなるはずです。

本企画は、本学の森林および社会科学を専門にする研究者たちと、家具産地・静岡で活動するつくり手たちが連携して取り組んだ最初の成果です。それぞれの先駆種の個性を感じられる家具が出来ました。みぢかな木の家具を通じて、森のこと、木のこと、社会のことを一緒に考えていきましょう。